

市広報やぶ1月号(第106号)「市長便り」で
ご紹介しました密 祐文さん(養父市八鹿町高柳
からの手紙です。

「人との出会い・命がくれたモノ」



野田すみこさんの親族の方々と密さん(右から2番目)

こんなことがあるのだろうか。
私は今、高野山真言宗総本山金剛峯寺の職員として今年の春からブラジル開教区に出向いています。ブラジルには多くの日系人の方々が住まいになっておられます。初めて足を踏み込む地です。今、毎日が出会いの日々です。そんな生活の中で私は素晴らしい出会いを頂きました。

そのきっかけは野田すみこさんという92歳のおばあちゃんの葬式に出向いたのが始まりでした。

私は1世の方が亡くなられた時はいつも親族の方に、「亡くなられた方は日本のどこの出身ですか?」と尋ねます。ですからその時もいつものように親族の方に尋ねました。

すると、親族の方は「兵庫県の・・・たぶん分からないと思うけど・・・」と言われました。「私も兵庫の生まれですから教えてください」と言うと親族の方から「あけのべ」というどこかで聞き覚えのある言葉を言われました。まさかかと思いきや「もしかしてそれは大屋町ですか?」と聞くと驚いた顔で「はい」と答えられました。

そしてすぐに「私は、隣の八鹿町の生まれですよ」と言うのとわらに驚いた顔をされました。

なぜならその親族とは、亡くなられたおばあちゃんの子供達であり小学生の頃までは明延で生活されていたからです。また、驚くことに亡くなられたおばあちゃんの旦那さんは50年前に移住してここブラジルの地で亡くなられましたが生前、明延におられる時はお坊さんとして薬師堂を護り「野田ぼんさん」と呼ばれる地域の方から親しまれていたということです。お坊さんの父をもち、幼い頃にブラジル移住されてきて苦労と共に60年近い時間が過ぎ私と出会い、これまで家族以外で口にする事はなかった「明延」を想い出され涙を流されていました。また、ブラジルに移住してから大屋を知っている方と今まで出会ったことはなく信じられない、夢みたいだと言われました。

こんなことがあるのだろうか。

私より明延で子供を育てブラジルで亡くなられた父母がこの出会いを誰よりも驚かれていることでしょう。もしくはこの出会いは父母から子供たちへの最期のプレゼントなのかもしれません。

こんな素晴らしい出会いに感謝しています。

高野山真言宗総本山金剛峯寺 国際布教師
ブラジル南米開教区金剛寺 密 祐文

まちの文化財

100

八鹿町道路元標

八鹿ふれあい倶楽部の前に八鹿町道路元標と書いた石碑があります。高さ77センチ、幅25センチの石柱です。

大正8年、日本で初めて道路法が公布されました。その施行令によって、道路元標は各市町村に1個を置き、管理者がこれを建設し、位置は県知事が定め、石材は25センチ角で高さ60センチのものと決められました。

大正9年には、兵庫県告示第225号で場所が決まりました。市内では八鹿町、建屋村、大屋村、西谷村の4例が現地に残っています。

当時の八鹿町役場は、八鹿小学校西側にあるハローワーク八鹿の場所にあります。なぜ、役場から離れた位置に道路元標が置かれたのでしょうか。

宮越の交差点から京口を通って八鹿ふれあい倶楽部に至る道路は、明治11年、生野から津居山に向かう県道改修事業によって作られた



八鹿ふれあい倶楽部付近の道路

ものです。それ以前は、上綱場から大森へ続く円山川沿いの街道が幹線道路でした。この結果、八鹿ふれあい倶楽部の前の道路は、豊岡・鳥取・姫路をむすぶ結節点となりました。但馬交通網の重要な分岐点となったのです。

ここには明治24年八鹿警察署が建てられ、その後、明治41年に八鹿郵便局となり、平成14年に八鹿ふれあい倶楽部が作られました。国道9号線が開通するまで、長い間、但馬交通網の結節点でした。このため八鹿町道路元標が設置されたのです。

昨年11月、北近畿豊岡自動車道が養父市まで開通しました。道路元標の意味はなくなりしましたが、今も静かに道路を見守っています。

(教育委員会社会教育課)